

5 井野川周辺の水田開発

井野川流域には、同道遺跡をはじめとして御布呂、芦田貝戸、熊野堂などの埋没水田遺構が集中して分布している。この井野川は、榛名山麓の相馬ヶ原火山山麓性扇状地に源を発し、前橋台地を群馬町・高崎市と流下しながら烏川に合川する総延長約26kmの河川である。河川勾配は平均0.9%で利根川の第3次支川になる。

水田遺跡の分布する中流域付近は、比高5m前後の崖線を形成しており、兩岸の地形は一見すると洪積台地状を呈している。しかし、その縁辺は断面に沖積土を介在しており、かつて兩岸には帯状の沖積地（＝水田適地）が存在したことが理解できる。現在では、この沖積地は度重なる火山噴出物の堆積で埋没しており、地表面は周辺の台地・微高地などと同一レベルになっている。このことは、かつて水田経営が盛んに行われていた井野川流域の沖積地帯は、火山災害により高燥化し最終的には畠地化したことをも物語っている。さらに、その後の井野川の侵食はこのことを一層助長し、旧地形の復元をより困難なものにしている。

井野川の侵食が悠久な時間のうちで助々に行われたものでないことは、同道遺跡最上面で検出された中世居館址のあり方で判明している。この居館址は15世紀後葉から16世紀初頭にかけてのもので、それぞれ5ヶ所づつの浅井戸と深井戸を有している。滞水層のあり方から、これらの井戸が同時に使用されていたとは考え難く、何らかの変化によって浅井戸から深井戸へ切り替えられたと考えられる。そして、この変化は利根川の変流に関連させて分析することにより理解が可能となる。^{*}

本稿は能登：1983（文献105）ですでに発表してあるものの概要である。

*第2図

現利根川は、前橋市大手町のさちの池あたりから群馬県庁の西側を、いきなり洪積台地を貫流するという極めて不自然な流路をとっている。旧利根川は現広瀬川流域を流下していたと考えられ、いつの日にか何らかの原因をもって現流路に変流したとしか考えられない。おそらく、現利根川は井野川と同様に榛名山麓から流下する八幡川の下流域の流路を争奪したものと考えられる。八幡川は、人工堀（農業用水）である天狗岩用水と現在では接続されているが、かつては群馬県庁の西側で大きく流路を変えつつ現利根川すじを流下していたのであろう。この八幡川の蛇行で侵食されていた地点へ利根川の側方侵食が到達し、その結果利根川による八幡川の河川争奪が行われたと考えられる。流路を変えた利根川は、一気にこの地域を侵食しつつ烏川との合流点を短縮し、第3次支川である井野川をもその影響下においたものであろう。井野川の急激な侵食はこの一連の出来事であり、その時期は同道遺跡の浅井戸、深井戸の切り替え時期である15世紀後葉から16世紀初頭の頃と考えられる。以上のことから、盛んに水田が耕作された4～6世紀における井野川周辺は、群馬県地域における水田耕作の最良適地であったことがうかがわれる。すなわち、井野川をはじめとする前橋台地一帯は、初期水田耕作としての伝統的な地域とすることができる。相馬ヶ原扇状地末端湧水を水源とする日高遺跡では、弥生時代中期の土器も出土しており、これを裏付けている。

（能登 健）